

# 羅振玉と山本竟山の文人交流

— 書簡と筆談を中心に —

蘇 浩

## The Literati exchanges between Luo Zhenyu and Kyôzan Yamamoto: Centering on letters and written conversation

SU Hao

Luo Zhenyu (1866-1940), a famous stone calligrapher and collector, began to interact with the Japanese while he was in his early thirties. In 1898, Luo Zhenyu and Fujita Toyohachi (1869-1929) founded the Dongwen Xueshe (東文学社) in Shanghai, teaching Japanese language and modern science. In 1901 and 1909 Zhang Zhidong ordered him to visit Japan, after which he left written records of his stay. The Xinhai (辛亥) Revolution broke out in October 1911 Qing China, Luo was reluctant to join the new government of the Republic of China, so he took his family to reside in Kyoto. Luo Zhenyu had correspondence with the stela calligrapher Yamamoto Kyôzan (1863-1934) before and during Luo's residence in Kyoto. They kept a written conversation. The content included exchanges on information about calligraphy and the purchase of calligraphy, as well as comments on daily life, all of which have been well preserved. This paper uses the letters and other documents of Yamamoto to discuss various aspects of Luo from Kyôzan's perspective.

キーワード： 羅振玉 (Luo Zhenyu), 山本竟山 (Kyôzan Yamamoto), 日本 (Japan),  
書簡 (Letter), 筆談 (Written conversation)

著名な金石学者である羅振玉（1866-1940）は、長年にわたって日本人と交流した。1898年、上海で藤田豊八（1869-1929）と「東文学社」を創立し、日本語授業と日本語で近代の科学文化に関して講義していた。1901年と1909年に、羅氏は張之洞（1837-1909）の命令を受けて日本を視察し、考察日記を残した。1911年10月に辛亥革命が勃発し、羅氏は中華民国政府への出仕を拒み、家族を連れて京都へ避難した。この期間及びその前に、近代の代表的な碑学書家である山本竟山（1863-1934）と書簡をやりとりしており、その筆談が残されている。内容は、書学の交流に関することだけではなく、碑法帖の代理購入の事項が含まれ、その他、日常生活にも触れている。本文は史料を踏まえながら、両氏の翰墨交流について考察する。

## 1 羅振玉と山本竟山

羅振玉（1866-1940）、字は叔言、号は雪堂。浙江省上虞の人で、清末に試署参事官兼京師大学堂農科大学監督となった。有名な清朝遺民であり、清末から中華民国初期にかけての考証学者・金石学者である。一時期、清朝末代皇帝である宣統帝（溥儀）の教育にあたったが、満州国成立後は参議府参議、監察院長を歴任した。その学問は多岐にわたるが、経学・史学に通じ、古典の校訂や甲骨、銅器、木簡などの新資料の研究に従事した。書家でもあり、とりわけ篆書を得意とした。また、書法の研究、特に北碑に対する研究が優れており、北碑に関する『碑別字』という異体字字典を上梓した。大正8年（1919）に帰国するまで、八年にわたって日本に寓居した。日本では、古器物や金石遺文などの精細かつ広範囲にわたる研究をして、とりわけ殷墟出土の遺物について、甲骨だけでなく伴出遺物にも関心を寄せ、王国維（1877-1927）と協力して殷文化の解明に努めた。絶え間なく著述に専念し、膨大な量の著書を編輯出版した。主著に『殷商貞卜（文字考）』『流沙墜簡』『殷墟書契』『三代吉金文存』などがある。1935年に旅順の居所に帰り、古物史料の整理や著述に専念した。

1896年、羅振玉と蔣伯斧（1866-1911）は、上海で「学農社」を創立し、その中に「農報館」を設置した。一方、『農学报』という新聞を創刊し、そこで専ら日本の農業に関する本を訳していた。1898年、藤田豊八と「東文学社」を創立し、日本語と近代科学文化を講義した。上海での経歴及び1901、1909年の二度の日本渡航で、羅振玉は日本の文明とその力強さを実感し、日本に避難することになった。

山本竟山（1863-1934）、名は由定、通称は卯兵衛、別号は襲鳳、岐阜県生まれである。鳴鶴門流の書家であり、日下部鳴鶴の紹介で楊守敬と師弟関係を結び、七回（1902、1903、1906、1910、1912、1921、1930）にわたって中国に遊学し、呉昌碩、王一亭など多くの文人とネットワークを結んで、北碑の真髓を習得した。1904-1912年の八年間にわたり台湾総督府の文化顧問

を務め、台湾書道の発展に大なる貢献をした。1912年に京都に移り、多くの子弟を指導し、関西書壇にその名を轟かせた<sup>1)</sup>。また、天皇家への上書代筆や名跡碑石の揮毫をしばしば依頼され、金石法帖や書画などを数多く網羅・蒐集する書道教育家でコレクターでもあった。加えて、書壇においては泰東書道院・日本美術協会・東方書道会・関西書道会などの顧問・審査長(員)を務め、書道グループ平安同好会を発足させ、数々の書の展覧雅会を主催・協力するなどの目立った業績を残している。

羅振玉が京都に寓居する前に、竟山は1902年に日下部鳴鶴の紹介で羅振玉と知り合い<sup>2)</sup>、初めての中国旅行で便宜を与えられ、また羅氏の友人である劉鶚(字鉄雲、1857-1909)が編集した『鉄雲藏龜』(1903)『鉄雲藏陶』(1904)の書名題字の書家として推薦されたのである。その後、両氏は書簡のやりとりを重ね、そのときの筆談の資料が残されている。書簡の住所や時期、筆談の内容から、羅振玉は岐阜・上海・京都にいた竟山と交流があったことが分かる。現在のところ、京都に寓居する前の羅氏の書簡が四通、筆談五枚が遺存しており、京都に寓居した時期の羅氏の書簡が九通、筆談八枚が遺存している。以下、それぞれの時期の順に、書簡と筆談について解説を行う。

## 2 京都に寓居する前の交流

1901年10月、両江総督(江蘇〈上海市を含む〉、安徽、江西三省の総督)劉坤一、湖広総督の張之洞は、教科書の編訳機関「江楚編訳局」を設立した。羅振玉は協力者として任命され、12月に視察団を率いて教育、財政制度を考察するために、東京、京都などを訪問し、その内容を『扶桑両月記』にまとめた。1901年12月14日から翌年2月19日に上海に帰着するまでの約二ヶ月間、東京、京都などで各種の学校の視察を行ったほか、日本の著名な教育者嘉納治五郎、伊沢修二らと幾度も会談し、中国の教育改革についての意見を求めた<sup>3)</sup>。羅振玉の『扶桑両月記』によれば<sup>4)</sup>、一月の初四日(1902年2月11日)から四日間京都で学校を視察し、一週間後、上海に

1) 門下に佐々木惣一(憲法学者・文化勲章受賞)、湯川秀樹(ノーベル物理学賞受賞)等が挙げられる多彩な方面の人たちが集まっていた。

2) 杉村邦彦「潘存臨鄭文公下碑の伝来とその歴史的意義」、『墨林談叢』、柳原書店、1998年、93頁。

3) 呂順長「清末における羅振玉の日本視察と訪書活動」、岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第17号、2018年、23頁。

4) 「初四日、午前九点十分鐘抵京都。…初五日、九点鐘、田中君遣郡視学塩崎君来、導観各学校、先至高等女学校。…閱畢、至第一高等小学校。…又至美術工芸学校。…初六日、至第三高等小学校。…初七日、県視学清水君(篤太郎)来、導観各学校。…閱畢返寓午飯、飯畢乘火車至大阪」、鐘叔河等主編、周功君校点『考察商務日記 考察農務日記 扶桑両月記 扶桑再遊記』、岳麓書社、2016年、112-117頁。

到着したことがわかる。以上の内容を踏まえて、図1の羅振玉と竟山の筆談に注目すると、「劉督軍」は劉坤一（1830-1902）を指しており、また「恨先生滯留日甚短」「本意在此滯留十日或一週間」「商学校事」などから1902年2月のものだと判断できる。

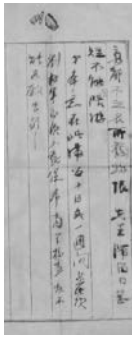


図1

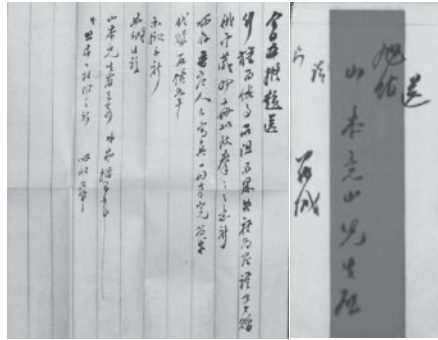


図2

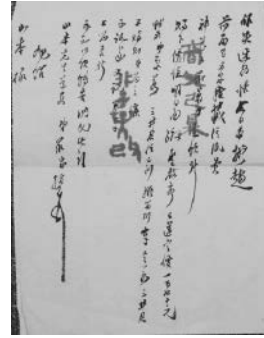


図3

- 図1 積文 山本：京都不乏名所旧跡、恨 先生滯留日甚短、不能普陪遊。  
羅：弟本意在此滯留十日或一週間、然此次劉督軍即須入觀、促歸商学校事、故不能如願、甚歎甚歎。
- 図2 積文 送旭館山本竟山先生啟。法 百成。  
今日本擬趨送、祈旌為俗事所沮、不果、失礼為罪。謹奉贈『鉄雲藏印』十冊、以致拳拳之意。祈晒存。晋唐人書寫真一冊奉完、尚求代購一冊、倘若幹示仰子。祈弗却。奉此祈。山本先生有道呈。弟求振玉頓首。弟照片一枚附呈。祈晒収、又申。
- 図3 積文 昨失迂、為悵。今日本擬趨前、雨甚不果。掩藏經紙費神甚之。茲著大走、欣祈賜下價值。明日面繳『聖教序』、已遞定価一百七十元、帳在弟處。若三井君信已到、擬留則奉呈。若三井君不購、則弟留之。候示祇遂、又祝卷奉上、留否祈示知以便轉告沈氏、此請山本先生道安。弟羅外振玉頓首。旭館山本様。

続いて、図2と図3の書簡に書かれている「旭館」という郵便の目的地に注目したい。これは1903年に竟山が鳴鶴の紹介によって、上海に行つて呉昌碩を訪問した時の旅館が旭館であることから、この二通が1903年の書簡だと推測される。図2の書簡において、羅振玉が劉鶚による438方古印を収録された『鉄雲藏印』一函十冊を贈ることが記されている。また、購入の代理人に晋唐人士の書道写真一冊を渡し、別紙で価格を記している。竟山は印章・印譜の愛好家であり、個人蔵の印章を三百夥あまり所蔵している。そのほか、竟山は有名人の印章や印譜を収集し、『餘清齋印譜』を編集した。一方、羅振玉の「赫連泉館古印保存・序文」に「予年十五、始学治印」とあり、「蒿里遺文目録・又序」に「予年十有六、始治金石文字之学」とある<sup>5)</sup>。少

5) 趙墨「羅振玉書学観及其收藏管窺」、『榮宝齋』、榮宝齋、2016年、82頁。

年時代の羅振玉は、すでに金石文字に触れており、しかも清朝の碑学の影響を受けている。これらが羅氏の独特な風格の甲骨文、金文創作に深く影響を与えたのである。

図3の書簡の内容は、主に法帖『聖教序』の購入についての交渉である。「三井君」とは、三井財団の有名な拓本収集家である三井高堅<sup>6)</sup>(1867-1945)を指している。高堅は法帖を好み、莫大な資金を後ろ盾として、文人の友人たちに碑法帖を収集するよう頼み、百数種類の古い拓本・善本を得ていた。冊子形式の拓本が中心で、収集品は高堅の号から「聴氷閣本」と呼ばれ、世界屈指の碑帖コレクションである。戦前の旧三井文庫で保管したもののうち大半はカリフォルニア大学バークレー校図書館に「聴氷閣文庫」として収蔵されているが、昭和60年(1985)三井新町家に秘蔵されてきた聴氷閣所蔵本の中核をなす碑帖が三井文庫に寄蔵され、平成3年(1991)初公開された<sup>7)</sup>。文庫には松煙本、博文堂本など多くの『聖教序』が保存されている。文中に記された「留否祈示知以便転告沈氏」というその沈氏は、書道の大儒である沈曾植(1850-1922)である。竟山と羅振玉は『聖教序』の仲介人として、購入予定の三井と所有者の沈曾植の仲介をしていたが、三井が購入しない場合、羅氏は自分の収蔵に当てると書いている。結局売り出すかどうかや、『聖教序』の版本についての考証は今のところなされていないが、中国国家博物館に沈曾植の北宋拓本の『聖教序』が、三井記念美術館にも羅振玉旧蔵の『聖教序』が収蔵されている。



図4

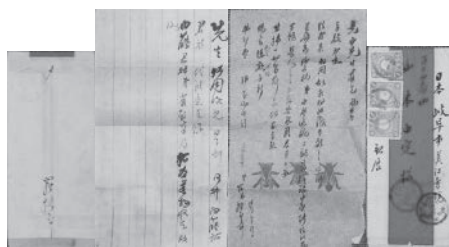


図5

- 6) 三井十一家の一つ三井松坂家に生まれ、のち三井新町家の9代目を継ぐ。呉服の御用名前・源右衛門を襲名。明治27年三井呉服店社長となる。42年三井合名設立に伴い同監査役、45年監査部長。大正2年三井鉱山代表取締役、3年三井物産社長、9年三井銀行社長を歴任。一方、美術品の収集家として知られ、書の収集で名高い。特に篆刻家・河井荃廬の強い影響で中国の拓本の収集に情熱を注ぎ、明治36年からは京都から荃廬を東京に招いて本格的に拓本を収集した。
- 7) 詳細は「三井高堅と聴氷閣拓本コレクションの形成」、三井記念美術館蔵品図録『聴氷閣旧蔵碑拓名帖撰——新町三井家——』、三井記念美術館、2005年、106-111頁；富田淳「槐安居コレクションと聴氷閣コレクション——高島菊次郎氏と三井高堅氏——」(『関西中国書画コレクションの過去と未来』、国際シンポジウム報告書、2012年、57-70頁)に詳しい。



- 図4 積文 山本：(河南)一元公。本日訪端公贈於我。廿五日開船便乘、現求申江何子貞分書、臨張遷、孰好任意。裴竟民昨日三件、一元五角不公。你所買不出三百文上、不信也。  
 羅：友人托 五元。  
 山本：三馬 儀晉每二角、中年書精拓給三角。  
 羅：二十四元八角再不能少。端公言候黃州軀身來此、來奉候到此地。  
 山本：明早晨往黃州無不可乎？大輪船夜、小輪船每晨九句鐘滿期於漢口可得、日前在匯豐問此事、雲九點開、不相當不能開。  
 羅：老先生言明晨料理不清、恐不能乎。化雲凡有事情安等、凡是未完。大輪亦有好處、輪船碼頭與我亦有交情、晚上無妨。  
 山本：我只恐夜間轎子有否？ 羅：船錢少多爾、此時萬不準走。  
 山本：測大輪官船尤好、錢多不要緊、本天轎子每人多少錢？  
 羅：每人百廿文、余有錢凡在太太手、此賜不閑、急刻我来。照你此樣未得此地好箱、一串七余文。  
 山本：晚上竹箱大的一只買來、我寫鐘鼎因筠清作金石拿棧。  
 羅：好皮看大小四五六七八元不等、『金石叢書』漢口廣東舖有。今日翻詠如何？
- 図5 積文 日本岐阜市美江寺釘百十四番地。山本由定様親啟。  
 竟山先生有道。拜奉手教。初意從者來敝国、故未即作復、甚歎甚歎。此作足履安勝為祝。弟由粵返滬、又就蘇撫端中丞轉任江蘇事務、勞人草草、不足告慰。周君月三承照拂一切、感荷無似。前奉懇賜書樓額(紙乞代購)与祈、弗卻費神。感謝。此請道安。弟羅叔振玉頓首。陰歷七月即日。先生賜用、後見日下部、河井、内藤諸君、祈代致意道候。内藤君贈送弟雀頭筆及拓本並物、收乞致謝。

図4は一枚両面の筆談で、原稿は濃い墨で気の向くままに書かれており、羅振玉か竟山かどちらの筆跡かは見分けにくい。各文の内容と両氏の筆跡によって上に積文をまとめてみる。上下の句のつながりには、時々違和感があり、おそらく一回限りの話ではない。内容は碑法帖の購入に関するものだけではなく、竟山が現地の交通などについての相談内容もあった。連絡船、時間、かご、価格などが挙げられている。そのほかに、筆談に現れる「端公」と「老先生」は、いずれも政界で一時羽振りを利かせた端方<sup>8)</sup>(1861-1911)を指している。端方は、清朝末期の立憲運動の指導者である共に、古美術の大収集家であった。『陶齋吉金録』などを著し、収蔵を通して広範囲に文化人と深い交流をもち、金石書画においてすこぶる高い名声を博した。図4の筆談中の「端公言候黃州軀身來此」というその「黃州」は、当時黃州府学教諭の楊守敬を指しており、また「漢口」の語から筆談の地は湖北漢口だったと分かる。清末新政<sup>9)</sup>(光緒新政とも称する)を背景として、1902年春、羅振玉は日本から帰国し、湖北に行って湖広総督(湖北・湖南両省の総督)張之洞(1837-1909)に拝謁した。また、初めて湖北巡撫の端方にも出会った。また、竟山の「本日訪端公贈於我」の文から、竟山と端方とが知り合いであったことが分

8) 満州正白旗の人、字は午橋、号は陶齋。立憲予備海外視察五大臣の一人として欧米を視察し、帰国後立憲予備運動を指導した。湖広総督、両江総督を歴任した。1911年川漢・粵漢鐵路督辦となり、四川の鐵道国有化反対運動を弾圧しようとしたが、部下に暗殺された。

9) 清末の1901年(光緒27年)以降、西太后の主導により清朝が推進した「立憲君主制への移行」、「科挙の廃止をふくむ教育改革」、「新軍の建設」、「商業の奨励」などの政治改革である。

かる。1902年に竟山は、当時「勤成学堂」総教長であった楊守敬<sup>10)</sup>を初めて訪問している。当時、楊守敬は端方の収蔵顧問の一人でもあった。竟山と端方とが知り合いになったのが、楊守敬・羅振玉のどちらの推薦によるものかは不明である。ただし、山本日記によって、1903年竟山は、漢口、黃州などの地を遊学し、湖北に長い期間滞在したことが分かる。筆談の内容から勘案すると、1903年に端方と会った可能性が高い。

図5の書簡は二枚あり、封筒に一銭の「大日本帝国郵便」の切手が三枚貼られ、上に「支那」の赤色印が押されている。消印「SHANGHAI 04 SEP 1」から、投函地は上海で、時期は民国4年(1904)9月1日であることが分かる。また、目的地岐阜市の消印「三七年九月八日」は、明治37年(1904)を指しており、羅振玉より1904年9月に竟山に宛てた書簡だと確定される。羅氏は代理購入の決算を述べるほか、自分の近況を竟山に報告した。「又就蘇撫端中丞轉任江蘇事務」の「端中丞」は、前文に触れた端方のことで、1904年端方は江蘇巡撫を担当し、江蘇省の教育顧問として羅振玉を招聘している。羅は端方の支持を得て、江蘇師範学堂を創設し、学堂監督を自ら担当した。書簡で羅氏が言及した日下部、河井、内藤の三人は、みな竟山より前に羅振玉と知り合っている。まず、1899年9月から11月まで、内藤湖南(1866-1934)は中国の北方と長江流域を遊覧し、羅振玉と会見して筆談を行っている。1902年、また内藤湖南は中国に来て、上海で旧友の羅振玉と出会っている<sup>11)</sup>。『扶桑兩月記』には、羅振玉と日下部鳴鶴、河井荃廬(1871-1945)らが面会した記録が数回記されており、共に金石学について語り、そして両氏が所蔵する墨と拓本などが贈られたことも記している<sup>12)</sup>。

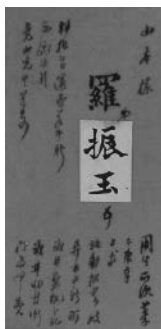


図6

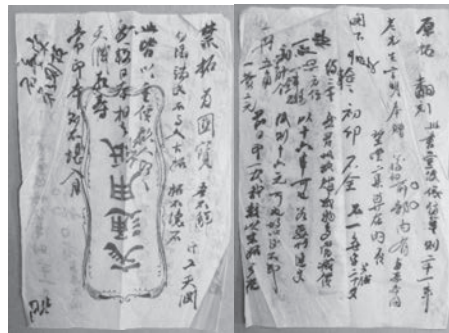


図7

10) 楊守敬著、熊会貞補述『楊守敬年譜』、上海大陸書局、1933年、44頁。

11) 両氏の第二回会見について、研究論文がある。張新朋「内藤湖南と羅振玉第二次筆談之研究」、『文献』。2016年11月第6期、171-181頁。

12) 鐘叔河等主編、周功君校点『考察商務日記 考察農務日記 扶桑兩月記 扶桑再遊記』、岳麓書社、2016年、81-126頁。

図6 积文 山本様 羅弟振玉頓首。周生所次其篆二東奉上、托郵船寄岐阜市中新釘武井制紙分社武井助右衛門（「有」は「右」の誤植、筆者註）為叩、費神極感。運費若干、祈示御。此請竟山先生道安。

図7 积文 山本：原拓翻刻、此書宣紙依仿單則二十壹串。

羅1：老先生言明奉贈閣下、沒卻前部内有與原本同。

山本：『望堂二集』算在内否？

羅2：初印不全、石一每字二十文、約三十串五百文。然均此次購我物多當減價、以十六串可也、若要竹連史紙則十六元也、故以後不即、前日印一次、我較以宋拓多訛。

山本：禁拓為国宝、吾不解。

羅3：勿怪端氏不與人古拓、拓不壞石、此皆以重價顧（「雇」の誤植、筆者註）人印之、然較日本相去天淵、找尋常印本則不堪入目。 山本：宋拓無則不知。

図6の書簡は、羅振玉が自分の名刺の上に書いたものであり、主に竟山の代理購入の確認について記されている。「武井製紙支社」に郵送されており、その武井製紙の主人は、和紙界で名高い武井助右衛門（生卒不詳）である。武井氏は、明治8年（1875）に事業を海外に発展させ、岐阜地区製紙業連合会のリーダーとして、海外貿易の紙製品の窓口として岐阜市新町に支社を開いた。その和紙は、1890年の国内博覧会で受賞（賞名不明）したことがある<sup>13)</sup>。郵送先の住所から、山本家は武井製紙支社の経営を担当していたことを推測できる。1904年9月竟山が台湾に赴任したことを考えると、この名刺は1902年2月以降1904年9月以前のもので断定できる。

一方、1909年5月、羅振玉は「京師大学堂農科監督」として農学考察のために再び日本へ向かい、京都、北海道、東京などを1ヶ月半ほど訪問し、『再遊扶桑記』を著した。二回の考察記<sup>14)</sup>を調べると、どちらにも古書や拓本の蒐集に関する記録が残されている。ただし、『扶桑両月記』より『再遊扶桑記』の方が簡略で、後者は古書や拓本を蒐集するかたわら、日本の文人たちとの交流や考証の成果なども記されている。図7の筆談の中で、羅振玉は拓本の状態と価格を竟山に伝え、竟山に特惠を与えることを承諾した。また、端方が拓本を竟山に贈与することも伝えている。一方、羅は、端方が古い拓本を人に与えない理由を釈明している。即ち無断複製者が多く、人の耳目をごまかしているから、見るに堪えないと記している。『望堂二集』は、1910年に完成された『望堂金石二集』を指しており、楊守敬が蒐集しながら影印した著作である<sup>15)</sup>。1910年に竟山が四回目の中国遊学を行ったことを考慮すると、図7は1910年中国での筆談であると推測される。

13) 広田三郎『明治実業家伝記集成・実業人傑伝』、第一卷第九篇、立体社、1984年、13-16頁。

14) 同38、81-15頁。

15) 1872年から始まり、『望堂金石文字』、『激素飞清閣摹刻金石文字』、『激素飞清閣摹刻古碑』、『激素飞清閣蔵碑』なども称している。



### 3 京都に寓居する時の交流

1911年に辛亥革命が勃発し、同年の12月、羅振玉は、創設した東文学社の顧問である藤田豊八による手配や、大谷光瑞（1876-1948）などの日本人の助けを得て、家族を連れて京都へ移居した。日本に行く前に、羅氏は百数件余の書画作品を京都帝国大学に郵送し、7月に京都市立絵画専門学校でそれらの作品の展覧会を行った。明治44年（1911）8月の『書画骨董雑誌』<sup>16)</sup>の中で「貴重支那画」（図8）という見出しの記事に、

「清国北京にて有数の藏画家たる羅振玉氏所藏の画幅を今回帝国大学に送致し来り、先月中旬同市絵画専門学校に於て其内の優品百数十点を陳列し、特志者の觀覽に供せし由。我国にて此の如く多数なる優秀の支那画を展觀せることは、殆んど其例なき事とて美術家の裨益尠からざりしと云う。其重なるものは、宋元にて李唐筆「田家嫁娶図卷」、孟玉潤筆「枇杷山鳥図」、明清には程嘉遜筆「山水の長卷」、沈石田筆「風樹画卷」、文徵明筆「墨竹の図」、仇英・陸治合作「美人雙六の図」、惲南田筆「花鳴夕陽図」、王石谷筆「山水の図」等なりしと。」

と記されている。

ここでは八件の展示物だけが列挙されたが、これらは羅振玉が日本へ移住するときに持ち出したものである。筆者は関西大学内藤文庫で、当時羅振玉が書いた郵送目録の手稿を調べた。図9は、手稿の「書之部」と「画之部」の冒頭ページである。一部の書画に価格が付けられているため、おそらく羅振玉はこれらを手放すことをすでに決めていたのであろう。京都に移住した後に、家族の生活費用を調達したり、個人研究を展開するため、持ってきた大量の書画を売却しなければならなかった。

例を見ると、内藤文庫に所蔵される羅氏の価格表の手稿（図41-44）<sup>17)</sup>には、六百件近くの書画や拓本が記録されている。羅振玉は自分の蒐集について、「予復尽出大雲書庫藏書三十万卷、古器物銘識拓本数千通、古彝器及他古器物千余品咨公搜討、復與海内外学者移書論学」と語り、その「三十万卷・数千通・千余品」という夥しい数を挙げていることから、単なる収蔵家と言えないほど大量の蒐集品を保有していたことが判明する。

16) 関西大学特別文庫蔵本、東京：書画骨董雑誌社編『書画骨董雑誌』（美術彙報）コラム、1911年8月10日、総第39号、31頁。

17) ここは手稿譜の最初と最後のページだけを展示する。



図8

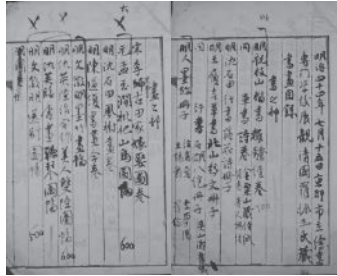


図9



図10

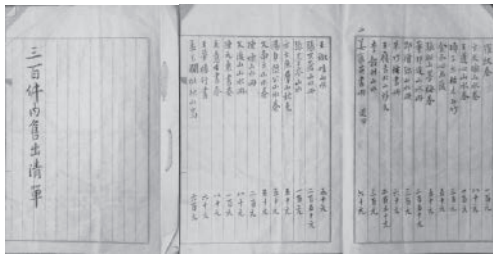


図11

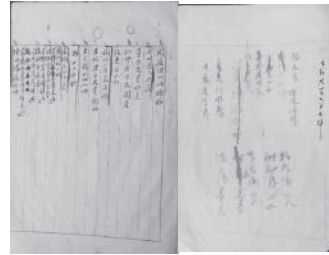


図12

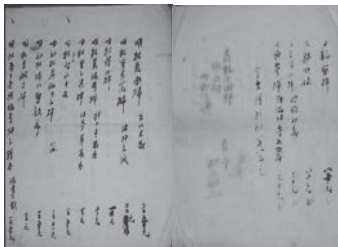


図13



図14

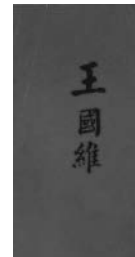


図15

1912年末、竟山は八年間勤務していた台北から日本に帰り、京都に定住し、京都帝国大学の書道教授（非常勤講師）の招聘を受けて、岡崎と室町（1913年から）に居を構えた。羅振玉の住所である「宸翰楼」（図10）が存在する馬場町は、竟山の家がある室町から歩いて10分の距離であった。現存する京都時代の羅氏の書簡は九通あり、内容によって金石碑版の代理購入や京都和漢法書展覧会への協力、京都の日常生活などに分けられる。京都和漢法書展覧会（三通）については、次回の論文に譲りたい。ほかに、筆談が八枚あり、主に代理購入の内容と書学交流に関連する内容である。

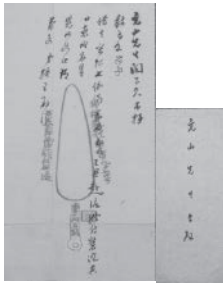


図16

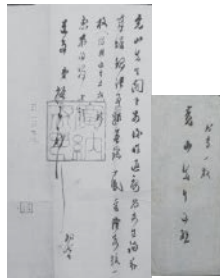


図17



図18

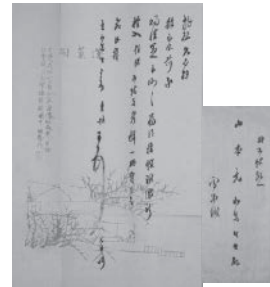


図19

- 図16釈文 竟山先生台啟。竟山先生閣下。久不拜教、至念。前承借去宋拓『七仏偈』、前因敝友王君赴滬、擬付裝沱、異日裝成、再奉覽何如。此請著安。弟振玉再拜。
- 図17釈文 竟山先生台啟 外專一枚。竟山先生閣下。別後昨返京、尚未道謁。前奉贈魏張黑女墓誌一紙、晉隆若甌一枚（紹興近出土者）祈惠存為荷、此請道安。弟振玉再拜。初七日。
- 図18釈文 竟山先生惠啟。竟山先生有道。久不拜教、甚以為念。弟昨由滬歸、俗事山積、不克趨前。言別伊邇、為之黯然。前奉呈乾隆水巖玫瑰小硯一、材質極佳、又石叟小香盤一、晋大康石礎銘一紙、小象一枚、温州黃檗木櫨研一、付用法。一時之別、祈惠存。弟啟行約在二十日後、尚得偷暇拜教、此請著安。弟玉再拜 王靜安兄託為致候。
- 図19釈文 拜啟。久不拜教、至念。前承賜佳第一、至謝至謝。『筠清館帖』附繳、祈於入拙錄。『石鼓文考釈』一冊、奉呈乞教。此請竟山先生道安。弟振玉頓首。七月初。

両氏の京都の住まいが近い為、書簡の封筒には大部分住所がなく、誰かに直接依頼して手渡したのであろう。このうち、「王君」と「王静安兄」は、羅が竟山に紹介した王国維（1877-1927）を指しており、竟山に与えた王国維の名刺（図15）が保存されている。この四通の書簡は、代理購入する羅氏の連絡状であり、その内に宋拓本『七仏偈』や『筠清館帖』などの有名な碑法帖だけでなく、魏時代の墓誌銘の石摺や出土した瓦当<sup>18)</sup>、硯などの文房具も挙がっている。また、図19の書簡によれば、羅振玉は研究上の代表作の一つである『石鼓文考釈』<sup>19)</sup>を竟山に送り、教示を乞うている。羅氏は出版に対して非常に積極的で、蒐集と校勘の都合に合わせて印刷も行った。しかし、当時出版の条件が限られたため、石印による影印などの複製が多く使われており、貴重な写本については、日本のコロタイプ製版で印刷されたりしているが、版印量が二百冊以下で少数である<sup>20)</sup>。

18) 羅振玉は瓦当に対しても研究があり、『高昌磚錄』などが挙げられ、羅振玉著・羅繼祖主編『漢西京以来鏡銘集録（外十四種）』（上海古籍出版社、2013年）に収録されている。

19) 関西大学内藤文庫蔵初印本宣紙珂罗版『石鼓文考釈』三卷、1916年。

20) 李蜜『羅振玉日本訪書及刊行述略』、『文献』、2016年3月、180頁。

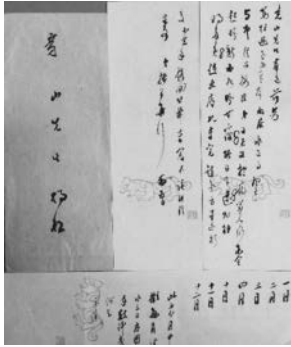


図20

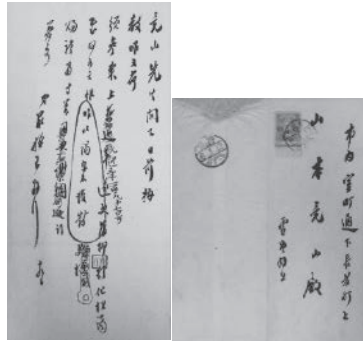


図21

- 図20 積文 竟山先生有道。前勞駕枉過、至為感荷。敝居水道事謝謝與市役所接洽、弟日來又抱痛、家人仍未全起、盼新水如盼甘露、能日下逮則擔賜水矣。『趨業庵觀』奉完。趨承方墨迹、祈交小兒手携回口畢。奉完不誤。此請道安。弟振玉再拜。初五日。一月、二月、三月、四月、十月、十一月、十二月此七個月中、敝每月借水三日、応用手数料幾何、乞示道。
- 図22 積文 竟山先生閣下 日前拜教、昨又荷須參棗上菓延年、遂更蒲柳頓化松筠、感何可言悵。昨以謁丘不獲対、更拜賜謹畫於箋、用申謝悵。此請答安。弟羅振玉再拜。十九日。

この二通は、主に羅振玉の京都での日常生活に関する書簡である。図20の三枚は、竟山に感謝を表す内容である。羅氏一家は京都に移居後に、引っ越しており、そのため水道水について京都市庁に手続きをしなければならなかった。あいにく羅氏一家は、新しい環境や気候風土に慣れず、病気がちだったため、竟山の助けで諸手続きを行っている。図21の書簡では、竟山から長生きするという「参棗上菓」（高麗人参・棗の漢方薬）を贈られ、絵画を返礼するを述べている。ただし、竟山からの返信がないため、事情の全貌を解明しにくい、この書簡から、両氏の親密な付き合いぶりをうかがうことができる。

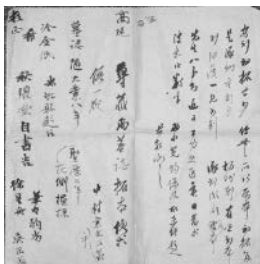


図22

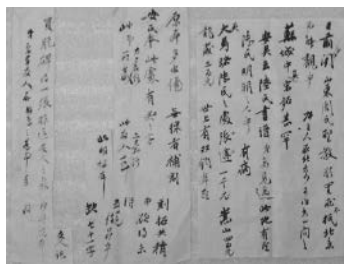


図23



図24

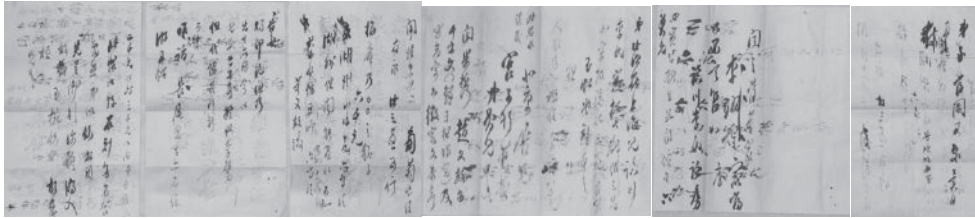


図25

## 筆談一 (図22) 积文

羅：安拓初刻甚少、伝世之所謂原本初拓多是涿州垂刻本、楊州別有？刻本則細瘦、一見有別、涿刻頗非宋本。先生八卜書近日工力更進、異日當求、隨意作數字、兩小兒均傷風故未能趨前教、謝謝。

山本：尊藏兩墓誌拓本倪假（借）一觀。 羅：中村襄氏所藏乎？

山本：墓誌隨（隋）大業八年、聖歷二年在側模樣、冷金紙、米虹縣題名。希教正秋碧堂自書、告筆力弱劣。徐星舟、吳岳翁。

## 筆談二 (図23) 积文

山本：目前夙山東周氏『聖教（序）』欲買求、不抵北京不能觀乎？

羅：舛主人在北京可作書一問之。

山本：蘇城中真宋拓甚罕、安吳雲陸氏『書譜』、弟未見過、此地有否？陸氏明朝之人乎？有病：英大馬路陸氏之處、張遷一千元、嵩山四百元、龍藏三百元。世上有双鉤本否？

山本：原本多蟲傷、無線者補刻、安氏本此處有矣之字、刻拓共精、弟欲得未得。

羅：此弟所藏太蠹傷、此友人本亦蠹傷、此明拓本五十元值昂乎？

山本：缺七十一字、友人託買脫碑得一張、昨送友人之處。

羅：何時脫本？弟處有友人存敝處之旧本、奉閱。

## 筆談三 (図24) 积文

山本：『西狹頌』酷似分書。

羅：『孟陰碑漢石經』、此錢梅臣藏本及野翁常熟者、世人未見也。饒生前懼為勢家所奪、故託言得双鉤本、其實所得乃拓本也。一本中怨黃本字數不及此本三之一、貢小松所藏本即從此本、析書與此。

山本：殷墟文字三封刀、二面皆光潔。

## 筆談四 (図25) 积文

羅 1：前承賜印泥、但乃先生所用今以見、惠甚不列擬仍奉璧、但代備幾何祈示下。昨訪長尾先生、亦不值『遊目帖』、二千元以外三千元以內弟力當可。此帖以幹石刻多石合處、然弟以何極日先呈、禦行尔願、仍入敝藏、玉腕錄中、故奉煩先生。

羅 2：聞謹昨得点二葡萄甚佳、友永此三画可行、梅広乃六千元之拓本。又湖州山水卷亦甚佳、湖州但聞能画仍不知其山水仿巨師亦甚佳、董文敏。

羅 3：弟至富岡君處、異日再請教。山本：芳陀利華室。

羅 4：聞之有当家李翊煌 写序、以及言 臨州李氏諫房。 山本：四宝皆願買、然聞備幾？

羅 5：六萬元。弟此次在上海見臨州李氏宋拓『大觀帖』三卷、北宋拓『淳化（帖）』三卷（有宋人題字）極佳、大小備八千元。 山本：此恐極保藏。

羅 6：北京展覽、宮王行旧藏、弟曾見之。聞果携趙為叔書『千字文』及宋高宗書、徽宗文集序。

筆談一にいう「安拓」は、筆談二にいう「安吳雲陸氏」を指している。羅振玉は、「初拓本」<sup>21)</sup>に相当な関心を持っており、各刻本の相違の比較から翻刻本の違いを引き出し、また碑版に関

21) 原碑から直接取拓されたもので、原刻拓本や原刻本ともいう。



して精通していた。一方、竟山は旧拓の「宋拓」に注目し、「蘇城中真宋拓甚罕」の語から、偽刻本の氾濫に対する憂慮を述べている。両氏は、拓本の版本を鑑定するとともに、購入に値するかどうかについて多く筆談している。さらに羅振玉の影響で、竟山は甲骨文字を習字し始め、書法の進歩を褒められた（「先生八ト書近日工力更進」）。筆談は論評とともに、購入する名碑帖類、『聖教序』、『西狹頌』、『書譜』、『孟陰碑漢石經』、『遊目帖』、『大観帖』、『淳化帖』などが挙げられており、両氏は金石書学に精通していたのみならず、甲骨書法から碑碣の墓誌銘まで幅広い学識を身につけていたのである。また、羅振玉は、中国への帰省と金石書画の蒐集以外は、ほとんど京都に滞在していたため、代理購入の窓口は上海にいた王国維であった。1916年2月、同郷人の鄒安（1864-1940）の招きに応じて、王国維は上海に帰り、哈同（1851-1931）の花園で雑誌『學術叢編』の編集を担当するかたわら、倉聖明智大学の教授を兼ねていた。王国維は上海に到着してまもなく、1919年に羅振玉が帰国するまで、羅氏による大量の「書画の売買」に重要な役割を果たした<sup>22)</sup>。



図26（第一列右から6番が羅振玉、第三列右から7番が竟山）



図27

## おわりに

1919年5月、羅振玉が帰国する際、内藤湖南、山本竟山らは京都の円山公園で送別会を開催した。東京、京都、大阪、神戸から三十七名の名高い日本の文人たちが参加し、記念写真を残している（図26）。杉村邦彦氏は、羅振玉にとっては「文字の福」と「文字の禍」が共存したと主張し述べた<sup>23)</sup>。すなわち大量の甲骨、石刻、木簡および敦煌文書の発見など、おびたしい文物が世に現れたことは、研究上の「福」と言える。一方、革命の烽起の時期に、大量の文化財

22) 談晟広「“以買売为旨”——一九一六年羅振玉王国維往来信札所涉書画事」、『中国書法』、2018年7月、5頁。

23) 杉村邦彦「羅振玉における“文字之福”と“文字之厄”」、『書論』第32号、2001年、117-118頁。

が海外へ流出するという事態を招いたのは「禍」であった。母国の情勢が不安定な中、羅振玉は慣れない異国の地で蒐集や出版に苦心する、いわゆる「伝古」であった。京都寓居の時期、羅振玉は、交際する日本人は多くなかったが、学問研究に集中することができた。竟山は、当時関西で金石に名高い書家であって、羅氏と共通の話題を共有する人物であっただろう。

辛亥革命の後、中国では軍閥の混戦となり、清朝の遺老などの文人たちは書画の集いを開く余裕もなかった。大正時代（1912-1925）、第一次世界大戦によって商品輸出が急増するという好景気により、日本の経済発展は頂点に達し、中国書画などの美術品を大量に購入する余裕があった。加えて、中国人の庚子賠款の一部をいわゆる対中文化事業に用い、書籍善本や美術品を購入した。山本竟山一族は、長期にわたって和紙事業を営み、すこぶる豊かな利潤を得る一方、竟山の八年間にわたる台湾勤務によってさらに高収入を得ていたため、碑法帖については大きな購買力を備えていた。羅振玉と竟山は古物を好み、かつ蒐集の鑑識眼を持っていた。1902年に知り合ってから、羅氏は何度も竟山のために碑法帖を代理購入し、また書学をめぐって交流した。筆談を通じて、羅氏は碑法帖について個人の意見を示し、各時代の蔵品の特徴を通して、その時期および流传する経緯を把握し、またその版本や文字を考証した。こうした活動を基盤にして、真偽と優劣を判断し、逸品を選出して影印出版を行ったのである。

日中両国文化の発展において、日本の漢文化は隋唐から受け継がれていると言えるが、秦漢の文化を摂取した部分は少ない。当時の書道学においては、特に碑版の篆書・隸書などに対する認識が不十分であり、羅振玉の日本における研究成果がこれらの欠落部分を補ったのである。長年にわたる中国の文化受容は、日本にとって一種の文化的意識として沈澱蓄積され、多くの日本の文人は断層の文化（秦漢）についての理解を望んだ。京都に寓居している間に、羅振玉は竟山を代表とする日本人たちの厚遇を受け、金石の学問に浸り、書画の流通を斡旋し、また影印出版事業も行った。1919年、羅振玉は京都を離れる前に、住所「宸翰楼」の中で清朝官服を着て最後の記念写真を撮った（図27）。羅振玉は、中華民国政府に出仕する意志はなく、「民国乃敌国」（民国は敵国である）と思い込んでおり、日本において中国の伝統的文化を研究し、「遺老」の歴史観を示した。羅振玉と山本竟山のネットワークは、中国の文墨趣味を伝えただけでなく、近代の日中文化交流を大きく促進したと言ってよいだろう。

